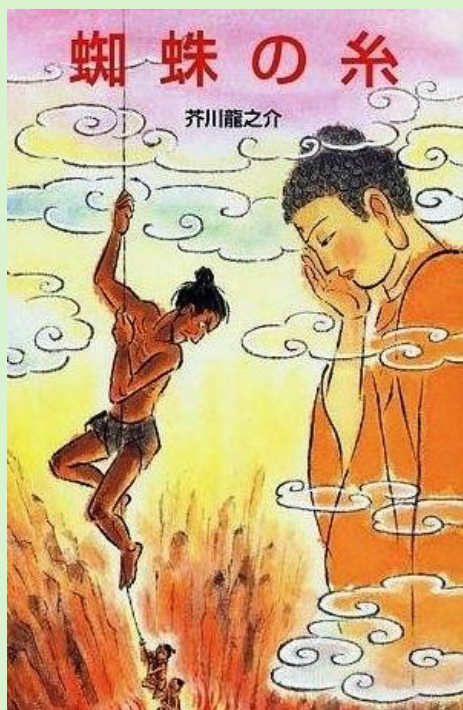


豊明希望チャペル(伝道)礼拝

2026年5月31日

「私たちが罪人であったとき」

ローマ人への手紙 5:8



芥川龍之介の蜘蛛の糸という話しをご存じでしょうか。

この話しは、もともと鈴木大拙（仏教学者、1870～1966）が書いた、19世紀ドイツの宗教学者「因果の小車」（ポール・ケーラス作「カルマ」の邦訳）を訳した、大正時代に書かれた話だそうです（大正七年四月十六日）。それを、芥川龍之介がいわば紹介した話しです。こんな話しです。

「ある日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池（はす）のふちを、独りでぶらぶら御歩きになっていらっしゃいました。・・極楽は丁度朝なのでございましょう。やがて御釈迦様はその池のふちに御佇（おたたず）みになって、水の面（おもて）をおおっている蓮の葉の間から、ふと下のようすを御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、丁度地獄の底に当って居りますから、

水晶のような水を透き徹して、三途（さんず）の河や針の山の景色が、・・はつきりと見えるのでございます。するとその地獄の底に、陀多（かんだた）と云う男が一人、ほかの罪人と一緒にうごめいている姿が、御眼に止まりました。この陀多と云う男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大どろぼうでございますが、それでもたった一つ、善い事を致した覚えがございます。と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛（くも）が一匹、路ばたを這（は）って行くのが見えました。そこで陀多は早速足を挙げて、踏み殺そうと致しましたが、・・・その蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございます。御釈迦様は地獄の様子を御覧になりながら、この陀多には蜘蛛を助けた事があるのを御思い出しになりました。そうしてそれだけの善い事をした報いに、・・見ますと、ひすいのような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけて居ります。御釈迦様はその蜘蛛の糸をそっと御手に御取りになって、玉のような白蓮（しらはす）の間から、遙か下にある地獄の底へ、まっすぐにそれをおろしなさいました。陀多（かんだた）は、早速その蜘蛛の糸を両手でしっかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐりのぼり始めました。・・・ところがふと気がつ

きますと、蜘蛛の糸の下の方には、数限りもない罪人たちが、自分ののぼった後をつけて、まるで蟻の行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼって来るではございませんか。・・・罪人たちは何百となく何千となく、まっ暗な血の池の底から、うようよとはい上って、細く光っている蜘蛛の糸を、一列になりながら、せっせとのぼって参ります。今の中にどうかしなければ、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまうのに違いありません。そこで陀多は大きな声を出して、「**こら、罪人ども。この蜘蛛の糸はおれのものだぞ。お前たちは一体誰にきいて、のぼって来た。下りろ。下りろ。**」とわめきました。その途端でございます。今まで何ともなかった蜘蛛の糸が、急に陀多のぶら下っている所から、ぷつりと音を立てて切れしました。・・・御釈迦様（おしゃかさま）は極楽の蓮池（はずいけ）のふちに立って、この一部始終をじっと見ていらっしやいましたが、やがて陀多が血の池の底へ石のように沈んでしまいますと、悲しそうな御顔をなさりながら、またぶらぶら御歩きになり始めました。**自分ばかり地獄からぬけ出そうとする、陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまったのが、御釈迦様の御目から見ると、浅ましく思召されたのでございましょう。**蓮の池の金色の蕊（ずい）からは、何とも云えないよいにおいが、たえまなくあたりへあふれて居ります。極楽ももう昼に近くなったのでございましょう。（大正七年四月十六日）」

こんな、話しです。



私たちが良く知る、因果応報の思想と、一方で、仏の慈悲というものについて、典型的な話しかと思います。私も、仏教の幼稚園に通っていたこともあって、良く聞かされた話で、今でもその話を思い出すことがあります。

幼き日に、雲が歩いているのを見て、踏まないようにまたいで歩いて、いつかこの蜘蛛が、自分にお返しをしてくれるかも知れないと考えたものです。

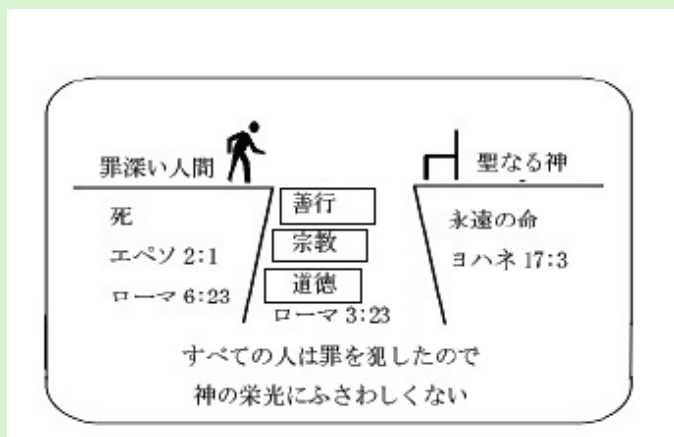
この話に出てくる、仏様とイエス様。そして、罪人の救いについて、考えてみるときに、こういうレベルの仏教の価値観ということ限定ではありますが、かなりの違いを感じます。もともとは、ドイツの宗教学者の、仏教観からくることですから、カッコ付きの、いわゆるこうした類の仏教の物の考え方との違いということになります。さっそく、今日の箇所を、今一度開きます。

ローマ人への手紙「5:8 しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。」

違うのは、おもに、(1)聖書の「救い」についての考え方と、罪の救い、あるいはゆるしの違い、(2)お釈迦様とイエス様のとの違いであります。まず、最初の

違いは、ここから考えなければなりません。

(1) 聖書の救い



1 罪の重さの違い

もっとも大きな違いは、罪の考え方が、聖書では決定的に重く深刻だと言うことです。善行でも、道德(善行とほぼ同じ?)でも、あらゆる宗教でも到達不可能だということを言っています。同じ聖書のローマ人への手紙にこのようにあります。

「3:10 次のように書いて

あるとおりです。「義人はいない。一人もいない。」

また、旧約聖書の伝道者の書にもこのようにあります。

「7:20 この地上に、正しい人は一人もいない。善を行い、罪に陥ることのない人は。」

もし、聖書に従えば、罪人でない人が、極楽にいるとするなら、極楽には、一人も人間がいないということになります。8割方、正しく生きていれば極楽に行けるとすれば、聖書の言う天国は、8割方ではダメで、100%正しくないと入れません。私が思うに、日本人がなかなか、キリスト教とその救いを受け入れられないのは、ここにあると思っています。それは、罪を深刻だと考えていないことの問題です。「そんなに厳しいこと言わなくてもいいのに」「そんなに、神は、寛容でない人なのか」と言うのです。

2、天国と極楽の違い

これは、更に言えば、極楽観と、天国観の違いとも言えますし、仏教とキリスト教の人間観の違いから来るのかなあと思うことがあります。

極楽と天国では、幸せ度が極端に違います。私の理解では、極楽に行っても、



悟りを完全に開いた特別な仏でないかぎり、また地上に戻る事があって、輪廻のカルマ?運命からは、逃れられません。しかし、キリスト教の天国は、最終到達地であり、永遠の場所です。聖書によれば、神さまが、人間の為につくられたエデンの園の場所です。正確には、キリスト

によって人が神の子とされ行く場所は、エデンの園以上の場所で、簡単に言えば、エデンの園は、墮落する可能性がある場所でしたが、天国は、善悪の知識の木によって、試される木がない、二度と墮落しない場所です。そこは、永遠性ということばかりではなく、愛においても、喜びにおいても、永遠不変で、あらゆる被造物との関係においても、へびに手を出しても噛まれない、ライオンと寄り添って寝ることが出来る、以前は災害をもたらすことのない、その関係性は完璧で、人間同志の関係性も、裏切られる事もない、愛が冷えることもない、開けっぴろげの裸でいても、比較もない、卑下もない、幸せな関係性を築ける場所です。ほかにたくさんあげる事が出来ますが、この極楽と天国の違いがあります。

ここから来る違いが、罪の深刻さの違いと、救いの大きさの違いに結びつきます。

救いの大きさと言う事で言えば、救われると言う事が、想像以上だということです。見たことも聞いたこともない、ビックリして腰を抜かすほどの場所が天国だと言うことです。ですから、悟った程度で入れる場所ではありません。ですから、ある意味で、人間に対する見方が厳しくなります。極端な言い方では、人生で一度でも罪を犯したら、天国には入れません。それほど、完璧でないと、暮らせない場所なのです。一度でも罪を犯したら、天国の秩序が崩壊してしまいます。それほど、すべての関係性が、神と人、人と人、人と被造物の関係性が、100%安心して委ね合える関係なのです。

繰り返しますが、ですから、聖書が言うとおりに、善人は一人もいない。誰もが罪人だと言う判断となります。すんわち、今一度強調すると、天国観と極楽観の違い。そして、罪観、あるいは罪をどのくらい深刻に考えるかの違いとなります。

そして、これこそ決定的ですが、救いをもたらす神の違いです。

(2)お釈迦様とイエス様

今日の箇所を今一度読みます。

ローマ人への手紙「5:8 しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。」

注目したいのは、「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれた」これが、神の愛であり、救いだと言っているということです。

私が教会にきて、なるほど、罪が私の中にもあると気づいて、より高い次元で、善行努力し、道徳を実行したから救われると言っていないということです。「罪人であったとき」と言って、「罪を克服したとき」とか、その罪に気づいて、悔い改めたときとかも一定いないということです。

言葉通り取ると、私が罪の中にどっぷりと浸かっている、神の救いを希望もせず、ただ肉の欲望のままに、生きていたそのときに、キリストは私の罪の代わりに死んで下さると決断して、私を神の子どもにして下さったと言う事です。

私が、自分の罪に気づいて、教会に来たときには、待っていたよ、私が罪を贖い、

選んだあなたよ、すでに、あなたの罪は赦されているよと、そんな迎え方をされると言うことです。それが、聖書で言う救いだと言うことです。

見て下さい。お釈迦様は、「**御釈迦様は極楽の蓮池（はず）のふちを、独りでぶらぶら御歩きになっていらっしやいました。・池のふちに御佇（おたたず）みになって、水の面（おもて）をおおっている蓮の葉の間から、ふと下のようすを御覧になりました。**」という存在です。そこにあるのは、ああ、カンダタも可愛そうだなと思われる慈悲であっても、聖書の愛ではありません。

今日の聖句で言えば、まず神は、天国から私たちを見ていて、私たちが生前、蜘蛛の命を救ったという善行ではなく、罪人のまま生きていること、そのものを見て



おられたというのです。善行ではなく、罪を見ておられたのです。

そして、次に違うのは、蜘蛛の糸を垂らしたのではなく、ひとり子であるキリストを、いわば地上に送り、地を這うように、私たちが自らの身体をはって、救い出したと言う事です。すなわち、そのキリストの命の代価と引き換えに、十字架の贖いを通して、私たちが救い出されたと言う事です。ここに、蜘蛛の糸に出てくる釈迦(仏教そのものではない・・・)と、キリストの決定的な違いがあり

ます。



さて、お話ししてきたように、聖書の罪の考え方の違い、そして、救いのレベルの違い、そして、救い主、あるいは神の行い、あり方、行いの違いについて見てきました。あらためて、聖書から見る、罪とその救いが、いかに徹底し、完全なものであることを、理解していただければ幸いです。

また、この救いが一方的な神の恵みであって、これを欲する者には、差別なく与えられる恵みだと知りたいたいのです。

マシュー・ヘンリーと説教者は、こう言います。「**クリスチャンを神は愛しているだけではない。神は彼らを愛することを愛しておられる方なのだ**」と言います。

神は、掛け値なく、あなたのことを愛されている事を知って下さい。

また、今週の歩み、クリスチャンは、心から愛され、一方的な恵みによって、ひたすら愛されている事を知る者として、多くの方々にこの神の愛と救いをお伝えし、証する者として、ここから出ていきたいと願います。